

研究分野のキーワード：比較社会学、文化の社会学、現代社会論、死の社会学、親密圏、記憶

研究紹介

皆さんは、葬儀やお墓の形が文化によって色々であるということは知っていますね。しかしそのことを社会的に考えるということはどういうことでしょうか。社会学とは、単純化すれば、人と人との関係についての学問です。葬儀やお墓等の死をめぐる文化を、死者も含めた人と人との関係の在り方の反映として考えるのが、死の文化の比較社会学、私の専門とする学問です。一つ具体的な例を挙げてみましょう。

皆さんは、死んだあとの骨を粉にして海や山に撒くという葬り方をご存知でしょうか。この葬り方が始まったのは、90年代、現在 NPO 法人となっている「葬送の自由をすすめる会」という運動団体が、死後の自己決定権としてこの葬り方を実施し始めた時です。伝統的には私たちの文化では、家のお墓に入れないことは、無縁仏になることとされ、死後子孫に祀ってもらえずさ迷い飢えに苦しむ靈魂になると考えられていました。したがって、この運動も、死んだ本人が希望して行ったこととはいえ、始まった当初は大変な非難を浴びたのです。しかし、少子化し教育や就職での社会移動の増加した現代では、家の墓を守ってくれる男の子を得ることや、いてもその子を近くにとどまらせることは、実は誰にとっても難しくなります。皆さんは無縁仏になることを、寂しいとか可哀そうとかあるいは不安に思うことはあるでしょうか。もはやそう思わないとすれば、それは死についての考え方や死者も含めた家族の関係が、すっかり変わってしまったからです。

どう変わったかについては学者の諸説がありますが、ここでは私の考えを述べておきましょう。かつては私たちは、自分の死後をすべてお任せできるような身内の中に生きることを普通と思い、男の子に跡を継がせることを大変大事なこととし、そのために色々な犠牲を払ってきました。しかし今では、私たちは、家やお墓のために、生き方を制限されたり犠牲を払ったりしたくないし、人にもさせたくないと思うのではないのでしょうか。そしてまたご先祖の一人として祀られるよりは、自分らしく葬られたい、思い出してもらいたいと思いませんか。私たちは、家という共同性に依存して生きる社会から、個性を活用する社会へと変化したのです。葬儀やお墓の在り方も、今、そうした社会の変化に伴い、新しい形が叢生しているところです。それに自由を感じる人もいれば、死後の頼りなさ、不安や孤独を感じる人もあるでしょう。近年問題となっている「孤独死」は、後者の感性による現代の捉え方ですね。

社会学として、死の文化を考えることはどのようなことか、幾らかでもわかっていただけたでしょうか。歴史や異文化との比較は、私たちが当然のこと、常識と思うことを、そうではないあり方を知ることで、単なる選択肢の一つとして捉えなおす視野を与えてくれます。生きづらさを抱えた人には、きっと役に立つと思います。わたしのように。